

校長室だより  
NO. 28  
平成30年9月18日

# すべては光る

梅園小学校長  
たか すりょうへい  
高須 亮平

## 梅園再発見 26 ～岡崎宿の伝馬町に大名が宿泊しました

江戸時代の伝馬町には宿泊施設が整えられ、諸大名をはじめとして多くの人々の宿泊と往来でにぎわいを見せていました。たくさんの宿屋が集まっていたため、この町は旅籠屋町とも呼ばれていました。その中で、公用旅行者のための宿泊施設があり、それを本陣と脇本陣と言われました（右は西本陣跡碑）。



大名行列(上)と  
本陣跡碑(伝馬通1)

本陣は、宿場で大名や旗本、幕府役人、天皇のお遣いである勅使、宮、門跡などの宿泊所として指定された家です。また、本陣だけに宿泊できないときに、予備にあてた宿舎が脇本陣でした。本陣に次ぐ格式の宿として脇本陣がありました。



本陣の由来については、明確なものとして寛永11(1634)年に将軍徳川家光が上洛の際に宿泊予定の邸宅の主人を「本陣役・本陣職」に任命したのが起源とされています。そして、翌年の参勤交代導入とともに制度化されました。

本陣や脇本陣は、原則として一般の者を泊めることは許されませんでした。時として一般旅行者が宿泊することもありました。しかし頻りに宿泊させられなかったため、経営的には苦しかったようです。それは、本陣には宿泊者から謝礼が支払われましたが、それは対価ではなくあくまでも謝礼であり、必ずしも対価として十分なものは言えなかったとされています。そこで本陣の指定に伴い、その家の主人には苗字帯刀(農工商などの庶民が名字を称し帯刀する士に準じる資格)、門や玄関、上段の間を設けることができるなどの特権が認められた。一方で、それらを名誉なこととして受け止め歓迎する向きもありましたが、出費がかさんだことで没落する家もありました。特に江戸時代後期になると、藩財政の悪化に伴う謝礼の減額や、本業である問屋や庄屋としての家業(商業や農業など)の不振による経営難で、元の本陣家が破綻し指定変えされたケースも少なくないということです。

伝馬町では、正徳3(1713)年頃、中根甚太郎と浜島久右衛門の2人が本陣をつとめ、両家は軒を接して中根家は六地藏町より北の突き当たり北側南向き(現・ミニストップ通り)、浜島家はその西の西側東向きの家でした。しかし、浜島家はその後没落し、代わって磯貝久右衛門家が本陣になりました。これは久右衛門小路町の入口東側(現・花一生花店)にあり、磯貝の後は服部専左衛門が本陣となっています。

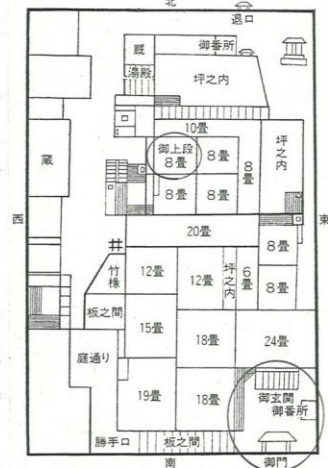
寛政・享和の時期は本陣は中根家と服部家の2軒、これを補充する脇本陣があり、西には大津屋勘助、東には鍵屋甚右衛門があり、他に脇本陣格として山本屋、桔梗屋、大藤屋、三升屋、浅田屋、植田屋等、有力旅籠がありました。

文政9(1826)年には本陣は中根家、服部家、大津家の3軒、天保14(1843)

裏面へ

年には本陣は同じ3軒、文久元（1861）年には本陣は中根甚太郎、服部小八郎、大津屋勘助の3軒、脇本陣は鍵屋定七、山本丑五郎、桔梗屋半三郎の3軒でした。

本陣の規模については、服部専左衛門家の屋敷図が右のように現存しています。これによると、その屋敷は非常に広く、部屋は200畳を越えています。公用旅行者や大名の宿泊に備えて建物は書院造で門、玄関、上段の間（右図○）があります。また、服部・中根家両本陣の坪高は、本陣服部家が御役地間口13間（23.63m）、裏行17間、此坪<sup>むしろ</sup>211坪、御年貢地63坪、建坪209坪半、畳245畳半、庭29枚とあります。本陣中根家は御役地間口12間、裏行17間、此坪204坪、御年貢地2反2畝9歩、67坪、建坪210坪7分5厘、畳241畳、庭38枚とあります。また、寛政3年には脇本陣の大津屋、鍵屋はともに78坪でした。ちなみに宿村大概帳で東海道五十三次の各宿場の本陣・脇本陣の総坪数を比べますと、多い順に吉原、小田原、箱根、草津、浜松の次が岡崎でした。



岡崎東本陣図(服部家)

脇本陣の桔梗屋についても、その由緒と経営の一端が次のように知られています。天保13（1842）年に桔梗屋半三郎が差し出した居宅諸職書留帳によると、その祖先は元文年間（1736～41）に加茂郡西広瀬村から岡崎伝馬町に出て旅籠屋商売を始めたということです。文政5（1822）年に家を建て替えています。その規模は表間口7間2尺、裏行17間、同12年に脇本陣を命ぜられました。天保5（1834）年正月12日夜半に類焼し、領主より普請のために15両を拝借しています。ところが、この火災のためか同14（1843）年には桔梗屋に代わって鍵屋定七、浜田屋新兵衛の両家が脇本陣を命ぜられました。その後、桔梗屋は幕末に再び脇本陣をして営業を続けています。

宿泊者について、「諸家中様御泊御人数并御旅籠代書抜」から脇本陣としての公用の家中の宿泊は必ずしも多くはなかったことがうかがわれます。ある年1年間に16回で、5月が最も多く3回、1・9月は宿泊なしで、宿泊人数は1回につき40人が最も多く、7人が最も少なかった。宿泊賃は必ずしも同一ではなく、上・下に分けて支払われている時もあります。最高が1人250文（約6250円）、最低は105文（約2625円）でした。中でも尾張藩関係者の宿泊賃が安くされていました。このようなことから、おそらく家中の宿泊だけでは脇本陣としての経営は苦しく、一般客からの宿泊賃にその多くを依存していたと考えられます。

文久2（1862）年の文久の改革によって参勤交代が形骸化し、さらに明治維新によって参勤交代が行われなくなると、本陣は有名無実となり、明治3（1870）年に明治政府より本陣名目の廃止が通達されて、制度としての本陣は消滅しました。

このように、江戸時代の岡崎宿伝馬町には大名行列が往来し、宿泊をしていたことは確実であり、東海道の要所として機能し、にぎやかであったことが分かります。

今回は、『新編岡崎市史』、旧『岡崎市史』を参考にしています。